

法華寺境内の調査

—第616次

1 はじめに

本調査は、法華寺境内における防犯施設改修・増設にともなう発掘調査である。既往の調査から工事掘削が、奈良時代の遺構面に到達することが想定される地区で発掘調査を実施した。

調査区は、本堂南東側の東区、本堂南側の西区の2カ所に設定した(図203・204)。両地区とも第363次調査区と一部重複するほか、西区は1954年の本堂解体修理にともなう発掘調査¹⁾の範囲と重複する。これまでの調査では、本堂前で10尺等間の桁行7間、梁行4間の二面廂東西棟建物SB8600、その東側で同規模の東西棟建物SB8601を検出している。第363次調査では、これらはある段階で掘立柱建物から礎石建物に移行したことが指摘されている(『紀要 2004』)。今回の調査区はSB8600、SB8601の柱想定位置にあたり、これらの遺構検出を主な課題とした。なお、記載の便宜上、SB8600、SB8601の東南隅柱を起点として、南から北へイ・ロ・ハ・ニ・ホ、東から西へ1～8と番付を与える(図204)。

調査面積は、東区が東西1.5m、南北8.5mの12.75㎡、西区が東西1m、南北14mの14㎡で合計26.75㎡である。調査期間は2019年9月2日から10月4日までである。

2 基本層序と検出遺構

東区の層序 第363次調査区を挟み、その北側では①表土・造成土(50～70cm)、②中近世堆積土(茶黄色土 約10cm)、③池埋土(灰色土 10～20cm)、④地山(青灰色粘土)、南側では①表土(20～40cm)、②中近世堆積土(緑青色土・明褐色土 10～40cm)、③池埋土(黄褐色土・緑灰色土・灰色土 30～50cm)、④地山(青灰色粘土)となる。いずれも④層の上面にて遺構検出をおこなった。検出面の標高は65.6～66.1mで、北から南に下る。調査区北部から中央部にかけては埋設管等があり、部分的な遺構検出にとどまった(図206)。なお、後述する池SG8605の埋土の堆積過程を検討するため、調査区東壁で土壌試料を採取した²⁾。

東西棟建物SB8601 調査区中央部のSB8601ニ6の柱

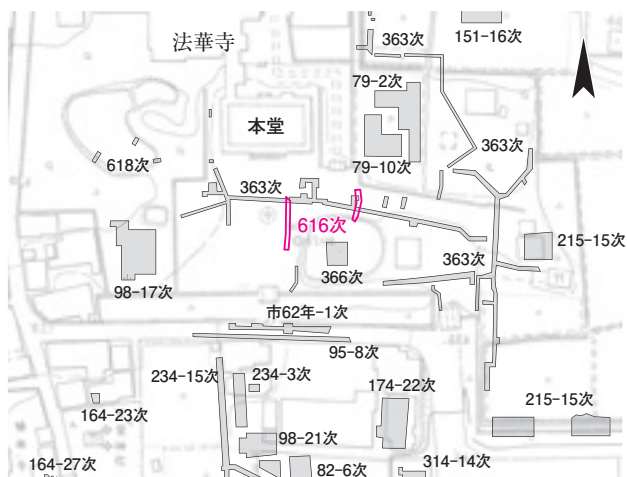


図203 第616次調査区位置図 1:2000

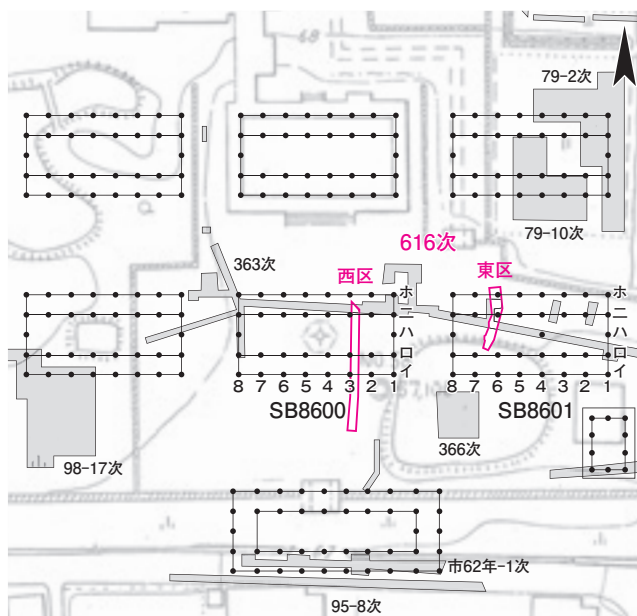


図204 第616次調査区位置図 1:1000

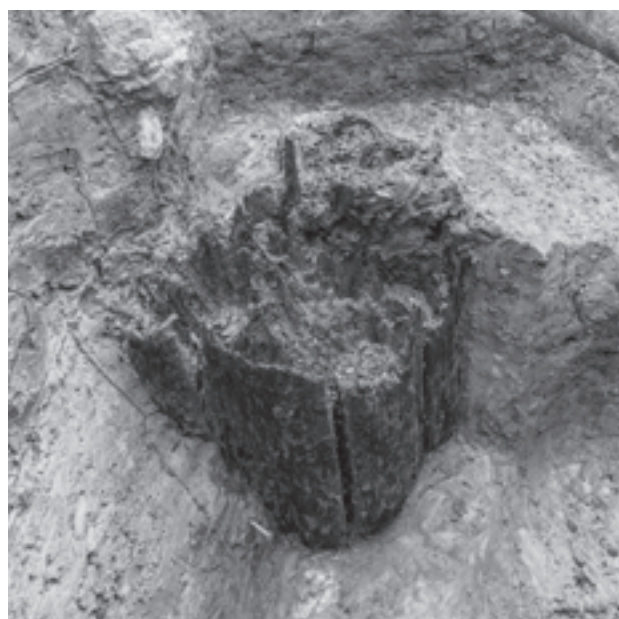


図205 東区 SB8601ニ6 B柱根(北から)

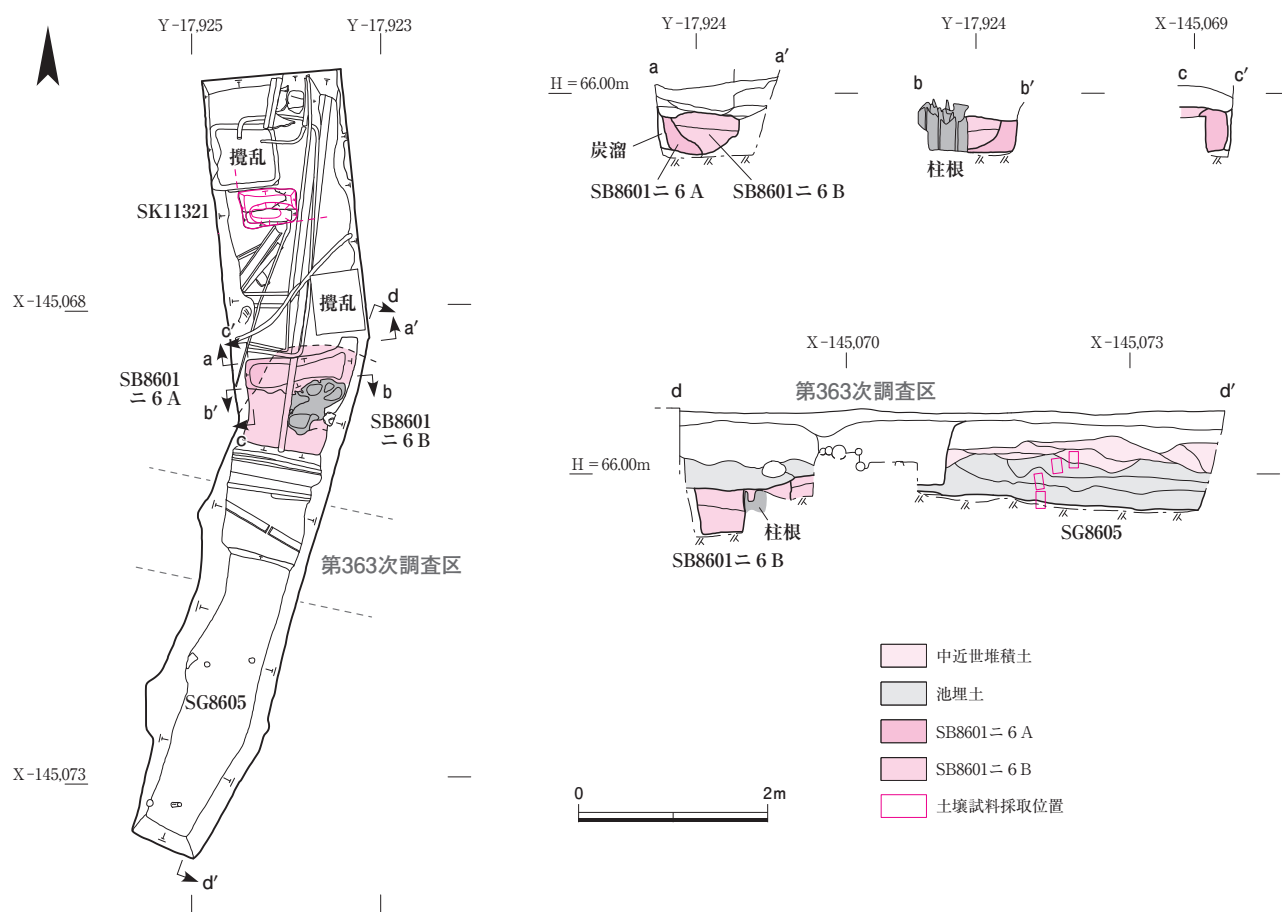


図206 第616次調査東区 遺構図・土層図 1:80

想定位置で重複する2基の柱穴を検出した。SB8601ニ6 Aは断面で検出した。幅40cm以上、深さ約40cm。遺構検出面の標高は約65.7m。幅10cm以上の柱状の炭溜を検出した。柱の腐食痕の可能性ある。SB8601ニ6 Aと重複するSB8601ニ6 Bは、平面において掘方の北肩のみ検出した。掘方は幅1m以上、深さ約40cm。SB8601ニ6 Bにともなう柱根は、径約60cm、残存高約55cmで、樹種はコウヤマキである³⁾(図205)。

土坑SK11321 調査区西北部にて検出した土坑。南肩、西肩のみを検出し、それ以外は現代の攪乱で削平されている。東西60cm以上、南北40cm以上、深さ約30cm。遺構検出面の標高は約66.1m。遺構の性格・年代はあきらかでない。

池SG8605 調査区南部にて検出した中近世の池。第363次調査でも検出していた。池底面には木杭4本が打ち込まれていた。また、SB8601ニ6の上層の池埋土中より人頭大の石が出土した。原位置をとどめてはいないが、護岸など池の施設の一部に由来する可能性がある。

西区の層序 ①表土・造成土(約10cm)、②中近世堆積土(茶褐色土 40~70cm)、③整地土(礎石ベース面 30cm以上)、④地山(砂層・浅黄色粘質土)。調査区北部には②が

なく、南部には②の下層に直接④が堆積する。③および④の上面で遺構検出をおこなった。検出面の標高は、北部は66.1~66.6m、南部は65.6~66.2mであり、北から南に下がる(図207)。後述のSB8600イ3の柱穴内の整地土の堆積構造、および全体の堆積過程を検討するため、調査区西壁のイ3周辺、ならびに南壁で土壌試料を採取した。

東西棟建物SB8600 これまでの調査で確認されている本堂前の東西棟建物SB8600の柱想定位置3ヵ所で柱穴を検出した。

ニ3は、整地土上面で検出した礎石と据付掘方。据付掘方は東西100cm以上、南北約110cm。礎石上面の標高は66.7~66.8m。直径60cm以上の礎石とともに、その周囲で根石を検出した(図208)。1954年の発掘調査で確認した遺構である。なお、遺構保存のため断割はせず、下層の掘立柱建物の柱穴は確認できていない。

ロ3は④層上面で検出した掘立柱穴。掘方は東西約60cm、南北約70cm、深さ約30cm。遺構検出面の標高は約65.7m。中心部において、外周部のみが残存した柱根を確認した。直径約40cm、残存高約25cm。樹種はコウヤマキである⁴⁾(図209)。柱穴直上では整地土を検出した。

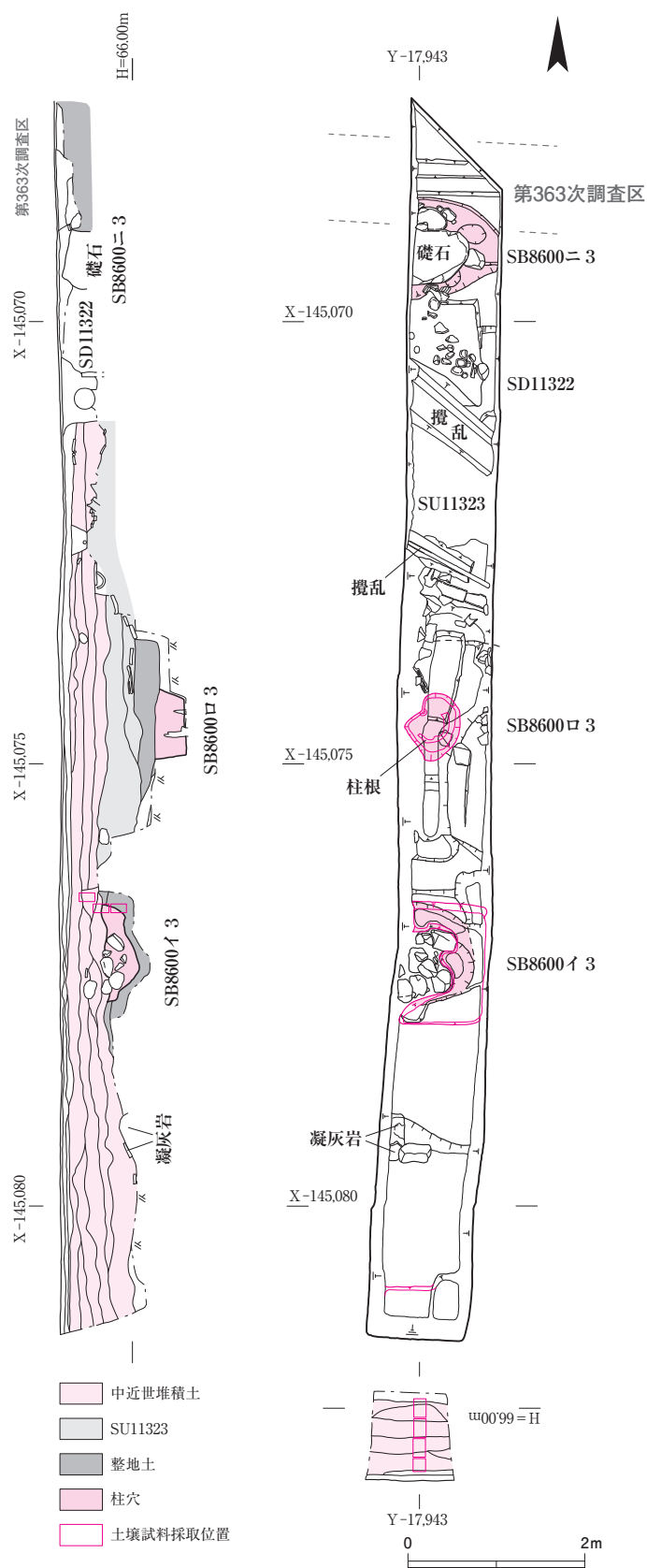


図207 第616次調査西区 遺構図・土層図 1 : 80

礎石を据え付けるための整地土の可能性はあるが、上面では、柱穴は確認できなかった。

イ3は整地土上面で検出した礎石建物の柱穴。東西80cm以上、南北約120cm。遺構検出面の標高は約66.3m。礎石が抜き取られ、根石が残った状態を検出した。根石



図208 西区 SB8600ニ3柱位置の礎石（南東から）



図209 西区 SB8600ロ3柱根（北から）



図210 西区 SB8600イ3柱位置の根石（北東から）

は整地土の上に据えられている（図210）。なお、遺構保存のため断割はせず、下層の掘立柱建物の柱穴は確認できていない。

石組溝SD11322 調査区北部の表土・造成土の下層にて、北西から南東に向かう近世の石組斜行溝の北肩を検

表27 第616次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			軒棧瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6138	F	1	6667	A	1	近世	1
	?	2	6691	A	1		
6284	E	1	6711	A	1		
菊丸 (小型・近世?)		1	葉321 (鎌倉)		7		
巴 (中近世)		1	法271D (室町)		1	軒棧瓦計	1
葉096 (鎌倉)		9	鎌倉		2	その他	
時代不明		12	中世		1	軒瓦 (丸平不明)	1
			時代不明		3	平瓦 (髪斗用)	1
						(刻印)	1
						面戸瓦	2
						伏間瓦	1
						鬼瓦 (鎌倉)	1
						(中世)	1
						(中世?)	1
						用途不明道具瓦	3
						(古代?)	1
						(留蓋/獅子口?)	1
						隅木蓋 (古代?)	1
						磚	3
軒丸瓦計		27	軒平瓦計		17	その他計	
丸瓦			平瓦			凝灰岩	
重量		149.291kg	重量		399.778kg	レンガ	
点数		918	重量		5.413kg	重量	
			点数		1.776kg	重量	
					14		
					0		

出した。遺構検出面の標高は66.8m。南肩は削平されたものとみられる。

瓦溜SU11323 調査区中央部にて、②層の下層で南北約5mにわたって検出した中近世の瓦溜。

このほか、調査区南部にて、幅約20cm、長さ30cmの長方形の凝灰岩、ならびに長さ40cmの人頭大の石を検出した。基壇外装に関連する可能性もあるが、調査区が狭小のため性格は不明である。

3 出土遺物

土器類 整理用コンテナ2箱分の土器類が出土した。大半は両区の表土・中近世堆積層、東区の池SG8605や西区の瓦溜SU11323からの出土である。瓦器・瓦質土器・黒色土器・土師器をはじめとした古代から中近世の土器のほか、奈良時代の土師器・須恵器を少数含む。建物にともなうものは時期不明の細片のみで、詳細な遺構の年代の把握は困難である。(丹羽崇史)

瓦磚類 出土した瓦磚類を表27にまとめた。奈良時代の瓦は少なく、大半が中世以降の瓦である。特筆すべきなのは、鎌倉時代の薬師寺96型式と321型式のセット(図211)がまとまって出土した点である。96型式は瓦当文様として「法」の古体字を採用しており、建長5年(1253)頃の法華寺金堂の再建時に用いられたものと考えられる。また、同範品は海龍王寺や薬師寺からも出土しており、海龍王寺では正応元年(1288)頃に堂舎を復興していることから、同時期の所産と判断して差し支えない(『薬師寺報告』)。(林 正憲)

金属製品 鉄釘23点が出土した。西区の中近世堆積土から出土した2点は角釘で、うち1点が折頭釘である。



図211 第616次調査出土中世瓦拓本 1:4

その他は西区の表土より出土した。

石製品 砥石1点、碁石1点、花崗岩や安山岩、凝灰岩の礫片が8点出土した。砥石は泥岩製で、東区の表土より出土した。碁石・凝灰岩片は西区の中近世堆積土、その他の礫片は東区より出土した。

ほかに木製の部材片や竹片などが数点出土している。

(浦 蓉子)

4 まとめ

本調査では、礎石建物、およびその下層の掘立柱建物の柱穴を計5基検出した。西区ではSB8600の柱想定位置で礎石建物のニ3とイ3、および掘立柱建物のロ3を検出した。ロ3の上部は中近世瓦層で攪乱を受けているためか、礎石建物の柱穴は検出できなかった。いっぽう、東区ではSB8601の柱想定位置で掘立柱建物の柱穴ニ6を検出した。現代や中近世の層による攪乱を受けているためか、礎石建物の痕跡は確認できなかった。しかしながら、掘立柱の柱根をとまう柱穴ニ6Bの西側において、それと重複関係にある掘立柱建物の柱穴ニ6Aを確認した。SB8601は、第363次調査においても上層で礎石建物の礎石や根石の据付痕跡は確認できていないが、少なくとも掘立柱建物の段階で2時期以上の建て替えがおこなわれていた可能性が考えられる。本調査では非常に限られた調査面積ではあったが、奈良時代の法華寺の建物変遷に関わる重要な成果を得ることができた。(丹羽)

註

- 1) 奈良県教育委員会文化財保存課『重要文化財法華寺本堂南門鐘楼修理工事報告書』1956。
- 2) 土壌試料の分析結果については別稿を予定している。
- 3) 薄片プレパラートの顕微鏡観察により、年代学研究室・星野安治が同定。
- 4) 註3と同じ。